

インタビュアー) 分析経験については、24歳のとき、あなたは分析を始めようと決心してから、すばやく心理学の研究に身を投じたのでしょうか？どのように事は進んだのでしょうか？その後すぐに、あるいは、分析の後ででしょうか？それとも5年分析した後のことでしょうか？

ルギル) それは5年間の分析の後のことです。私は哲学を教え始めて、そして精神分析学部と出会いました。なぜならそこで結局のところ研究することが興味をひいたのですが、私は精神分析のテキストを読みたいと思ったからなのです。そういうふうに物事は運びました。研究へのこの嗜好を私は再び見いだして、パリ8の精神分析学部と出会いました。夜間に研究のセミネールが開かれているところのドアを開けたのです。つまり昼間に哲学を教えることをしながら、夜はセミネールに通うことができました。

インタビュアー) すでに何人か知り合いはいましたか？

ルギル) ええ。その場所のことを教えてくれた人たちとは知り合いでした。それはひとめぼれでしたね。ええ、ひとめぼれです、ひとつの出会いです。セルジュ・コテという名前の教授のセミネールに通っていました。彼は最初哲学をやっていて、ラカンの書いたものを注釈し読んでいました。

私は大したことは分かりませんでした。それは「知を想定された主体の取り違い」という論文を扱っていました。まあでもそこで、私はテキストやパロールのひとつの読み方と出会いました。そしてその時、ラカン派の分析家と自分の分析を続けたいと思いました。

それからまた、精神分析学部の枠のなかでの、もうひとつべつの、基本的な出会いもありました。それがセクション・クリニック（臨床部門）と呼ばれるものです。つまり精神分析学部では、当時はDEAと呼ばれていたのですが、いまはマスター2です、その学生として講義に出席できます。それと同時に、セクションクリニックの、臨床的な対話にも出席できたのですね。当時それは「患者呈示」と呼ばれていました。

そういうわけで、私は大きなチャンスを得ました。つまりその少し後には、29歳のとき、私はサンタンヌ病院で、エリック・ロランの患者呈示の講義に出席することができました。臨床との出会いは、自分にとりショックでした。臨床、狂気。狂気と出会うことはショックでしたね。狂気とのこの出会い以降、ラカン派の分析的臨床を私は続けています。

それは本当に、本当に大きなことだったので、ラカン派の分析を受けたいという気持ちにさせたのです。私は臨床提示を目の当たりにして、ラカンにとってはいかにすべてがパロールとランガージュからなされるべきなのか、理解しました。結局のところどれほどまで

に言表行為における言表文自体のなかに、主体のフレーズのなかに、ひとが解読すべきものがあるのか、苦しみから何かを切り離せるのかが、分かりました。それは本当に、私はパロールも、語も、書物も好きですので・・・。

それで本当に私はラカン派の分析がしたくて、29歳、もしくは30歳だったかな、ラカン派の分析を再開しました。同時にその頃は心理学部のほうでも勉強していました。というのは、将来精神分析を実践するためには、心理士にならないといけないと知っていたからです。

お話ししながら気が付いたことですが、そんなふうに私は結局、よく自分の活動生活のなかで一種の二重化を行っているようです。一方で哲学を教えながら、他方心理学の勉強をしていて、それに加えて自分の分析も進めていました。そんな感じでした。

その後、私はとりわけ自分の分析によって自分を形成しました。あととても自分にとって大切だった講義がありました。それもパリ8の精神分析学部でのもので、ジャック＝アラ・ミレールの講義でした。「ラカンのオリエンテーション」というタイトルのもと行われていました。開かれている講義で、大学に登録していないひとでも出席可能でした。というのは、私はDEAを終えたあと、大学には再登録しなかったからです。つまり学部やマスターではふつうは登録しないということです。

そうです。それでこのミレールの講義というのはラカンの注釈の講義ですが、それ以上のものがありました。精神分析の伝達の講義でした。私は10年間講義に出席しつづけました。もちろんこの出会い、JAMとの出会いは根本的なものでした。彼は哲学科を出ていることもあります。

そういうわけかわかりませんが、私は彼の講義にいと、本当に自分の家にいると感じました。やったあ、そこにいたいと思える場所と私は出会えたのだ、と、思いました。私に合う知的要請のなかの、何かがそこにはありました。同時に、私のなかに強くこだまする、分析経験のなかにつなぎ留めるものの、何かもそこにはありました。

結局私はあまりに早く、こんな風に、一種の大学のロジックのようなものには戻りたくなかったのです。その時そのようなものを望んでいなかったと思います。

ですから教育の実践があり、私は教えるのが好きでしたし、最終学年にいるのも好きでした。じつのところ、私は最終学年の生徒たちを再発見していました。教え始めたのは私はまだとても若い頃で、教えていて、生徒たちの瞳のなかに、ちょっとした輝きがともるのを見るのが好きでした。例えば1時間騒がしい授業をした後、反響がこだまするのを聞いていました。というのは、私は生徒たちに人間の条件について何かを話していたからで、私は自分の話が彼らに波紋を起こしたのを感じていて、突然そういう時間が好きになった

のです。それから生徒たちに精神分析を発見させることも好きでした。彼らもまた精神分析の発見が好きだったと思いますよ。

インタビュアー) 生徒たちは話に食いついたのですね。それからあなたは臨床的な活動もしましたよね。あなたは研修も受けたりしたのでしょうか？

ルギル) その通りです。そのせいで私は、まず心理学の研究を再開したのですがそれも好きなことでした。学ぶのが好きだったし、学生として学ぶのも好きでした。だから私に対して「へえ～、勇気あるね」という人たちもいましたよ。でもそれは勇気の問題ではありません。午前中は生徒たちに対して授業を行って、午後は学部の学生席に座るために戻るという、両方の時間を持ちました。それはとても幸せなことでしたね。

そして、一年目ではなかったと思いますが、私はすでに教授資格を持っていました。同等のものが私には与えられていたので、三年目から再開しました。ですから学士相当のものはもっていました。そしてそれはすごく良かったのです。というのは心理学の3年生のときは、ざっという一年目から研修をうけなければなりませんでした。でもそれこそまさに私がしたかったことなのです。心理学の研究のなかでは、私は3年間情熱的に研修を受けたと言えます。

サルペトリエール病院（パリ）で、精神科の研修を受けました。フォサッティ教授のところでした。すごく良かったです。そのあと CMP の子ども部門で研修をしたのですが、女性心理学者とともに受けました。その女性は、偉大な哲学者であるナディア・フィロネンコという哲学者のお嬢さんで、素晴らしい女性でした。

彼女は本当にすばらしかったのです。彼女はそのすべての面談を子どもと、私も同席で行ってくれました。ですから彼女と私は学びましたし、臨床を学ぶことができて、それは半年間続きました。それはドルトのやり方でしたね。臨床の経験としては、ドルトには多くのものを負っていると私は思っています。ですからそれら 3 年間で、臨床実践を学ぶことができました。

そして心理学の資格を得たときに、私は制度（病院や施設など、個人開業ではない形の場）のなかで働くかどうか自分に問いました。でもそこでもまた、物事はそんなふうには提示されませんでした。というのは、まずは哲学を教えることをやりつづけていたのですが、その時私は初めての子どもを出産したからです。それで本当に子どもに時間を割きたいと思いました。それで教えることについてはパートタイムにして、多くの時間を子どもに割くことにしました。保育園で子どもが過ごす頃には、まさに私の心理学の研究の終わりといった頃でした。2002 年のことでしたね。2002 年に心理学の研究が終わりました。

32 歳、あるいは 33 歳ころでしたね。最初の子どもを出産したのが 33 歳でした。そのあと少しして、私は CPCT というセンター（「相談と治療のための精神分析的センター」）で、ボランティアとして働きました。CPCT は CMP のようなところで、無料で患者を受け入れるところです。やり方のオリエンテーションは精神分析的なものになっています。精神分析の分野で働いてみないかと私は提案されました。それはエレヌ・デルトンプさんという女性精神分析家の提案で、彼女からたくさん私は学びました。彼女は ECF の精神分析家であり、CPCT で働くように誘ってくれたのです。

そこで私は 5 年間働いて、並行して、自分のキャビネを開きもしました。というのはじつは 10 年にわたる自分自身の分析が区切りを迎えていて、私の経験のなかで重要な一步を踏み出したところだったのです。いくつかの仕事をその経験のなかで呈示したことでそれを示しました。それで私は最初の患者たちを、自分のキャビネに迎えはじめました。

インタビュアー）研修のときとか、そのあとでも良いですが、何か特別な出会いというものはありましたか？あなたの欲望を確認するような、はっきりとところに刻み込まれた出会いなどはあったでしょうか。精神分析のほうへ方向づけるような、それらの研究をつづけたり終わらせたりするあなたの欲望を方向づけるような出会いのことです。そのような出会いはあったでしょうか？

ルギル) それはもちろんありました。それは分析自体がそうで、分析は私の欲望を方向付けてくれましたし、自分のエネルギーを注力するものをあまり多様化させないように、方向づけてもくれたと思います。ある時、私は精神分析を選択しましたが、よくひとつの思い出が浮かび上がってきます。それはアヴィニヨンの演劇フェスティバルに行ったときのセッションでしたが、私は演劇で何人かの私の友達が演じているのを見て、歓喜を再びおぼえたのです。そんなふうに私は演劇について分析で再び語りつつ、精神分析についても語りました。そして私が「私は精神分析を選択しました」と言った時に、分析家がまさに切れ目を与えたのをとてもよく覚えています。

インタビュアー) 患者さんのなかにも、同じように印象的な出会いというものはありませんか？

ルギル) はい、あります。ベクレール病院でも私は研修を受けたのですが、そこは産婦人科での研修でした。というのは心理学の研究をしたときは、私はまさに母になるところだったからです。当時私はラカンのセミネールの4巻、「対象関係」について勉強をしていたのですが、ラカンのセミネールのなかで私の関心をひいたのがそれでした。私は「母になること」について、勉強をしたかったのです。それで母親たちとの面談に、研修のなかで行くようにしていました。初めて子どもをもつ母親たちのところでした。私はそこで研修をするのが大好きでした。

私自身は当時まだ母になる前でしたが、勿論母になりたいという、この欲望について探求したかったのです。よく思い出すのは、ある若いお母さんのことです。研修のために心理士が同席することを受け入れてくれた方です。彼女は研修の私の部屋で、私との面談を承諾してくれました。それはとてもよい面談だったと思います。実は臨床の面談としては初めてのものでした。素敵なものでしたね。彼女は子どもを持とうとしたができなかったここ数年について、あらゆることを私に語ってくれました。彼女は SNCF（鉄道会社）で働いていたことがあったのですが、それもまたとても素敵なことでした。というのは、この若いお母さんは SNCF で働いていたことを語りながら、つまりは、鉄道、電車の領域で働いていたわけですが、私にそう語りながら、「それがブレーキをかけるんです」「それがブレーキをかけるんです」と言うのを繰り返していたからです。

私はこのシニフィアンを取り上げたのを思い出します。たぶん私がした最初の分析的解釈
だったと思います。 (つづく)